

国土の保全と間宮海峡への一考察

間宮林蔵伝承研究会 会長 林蔵六代目 間宮 恂

(NPO法人 社会基盤の超長寿命化を考える日本会議 理事・事務局長)



CNCP の会員として毎月送られてくる CNCP 通信に日頃関心を示しているが、とくに最近の Vol.40~Vol.42 において新しく「明治 150 年企画特集」が動き出したことを知った。その発端の時期よりさらに 50 年ほど遡っての、しかもアウトバウンドの活動であるので、私事を含んでの助走的な話題提供になるかも知れないが、私の 6 代先祖である間宮林蔵が当時関わっていた北方問題の一端に触れておきたい

1. 国土保全

国家にとって、「国土」がいかなるものであり、国土を研究し、保全することが、いかに重要であるかは理解されていると思う。世界の紛争の重要さの一つに、国民、民族の居住地の確保がある。CNCP に関係する方々には、そうした視点で、一つの出来事、業務がとてつもない国土の保全につながっているということを感じながら活躍をしてもらいたい。

さて、間宮林蔵の行動は、測量技術、移手段が貧弱で、北方に関する知識が皆無という中での国土を保全するという任務であり、樺太は南北 950 キロ(東京から札幌に相当)からなる極寒の地であり、想像を絶するものがあつた。時まさに江戸時代が終焉にむかう 18 世紀から 19 世紀の日本各地の出来事は、その後の大きな変化につながっていく。西欧列強の植民地政策は、未知の世界とりわけ東アジアへの進出が、土木工学、造船技術、天文学等あらゆるものの発達によって可能となり、新世界の発見、開発に覇が競われていた。「日本」への波が激しさを増していたころ、我が国にとっても北方蝦夷地における国土の実態解明が国防に関する重要な任務であつた。

右の肖像画は、明治 43 年、大正・昭和初期にかけて活動した日本画家松岡映丘画伯(1881~1938)の手によるものである。四代目正倫 48 歳、五代目英崇 15 歳の二人が牛込のアトリエでモデルになった。なお、松岡映丘の実兄は、民俗学者の柳田国男である。五代目英崇は、わが父。



間宮林蔵肖像画



林蔵による樺太図

2. 蝦夷地から樺太へ

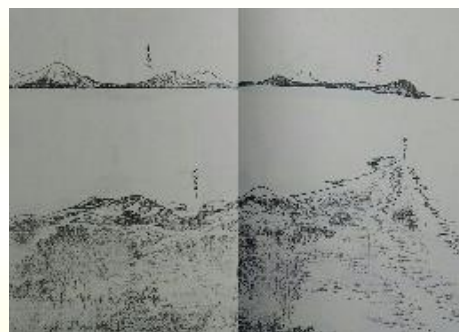
林蔵は、常陸国筑波郡上平柳村(現茨城県つくばみらい市上平柳)の小貝川のほとりで、安政 9 年(1780)生を受け、天保 15 年(1844)に、その生涯に幕を閉じた。寛政 7 年(1795)、林蔵 15 歳の春、関東三大堰の一つ岡堰の幕府直轄事業において、工事方法に助言を行った林蔵は幕府普請役下條吉之助に認められ、江戸に出、普請役村上島之允に師事することになる。

寛政 11 年(1799)、村上島之允の従者として初めて蝦夷地に渡り、翌年、函館にて伊能忠敬と子弟の約を結び(忠敬 54 歳、林蔵 20 歳)、測量器具を譲り受け、蝦夷地御用雇として測量術の精度を高めた。平成 26 年(2014)8 月、伊能忠敬研究会は、伊能忠敬の手によって完成されたとする大日本沿海輿地全図の北海道部分は、そのほとんどが、林蔵の測量のデータを基にして描かれた、と述べている。

当時、樺太が「半島」であるのか「島」であるかを見極めるべく、幕府天文方の高橋景保は、松田伝十郎、間宮林蔵を樺太に派遣し、探検を命じた。林蔵は、文化 5 年(1808)、海峡があることを発見、樺太が島であることを確認し、西岸ラッカに「大日本国国境」の標柱を建てた。

林蔵は、二回目の探検で、樺太から大陸に渡り、黒竜江アムール川をさかのぼり、清国政府の出張所が置かれていたデレン迄足を延ばし、交流するとともに、ロシア帝国の動向をうかがうべく、一帯を調査し、ロシア帝国は極東地域を支配しておらず、清国が勢力を及ぼしていることを見極めた。

時は、遡るが、東蝦夷地、南千島を測量し、択捉島にわたり、沿岸測量、新道開発にあっていた際、ロシア軍艦が択捉島会所シャナを襲う事件が起きた。林蔵は徹底抗戦を主張したが、受け入れられず、やむなく撤退した。ロシアに敗れた汚名をそそぐためには、ロシアに潜入し、情勢を探る以外にないと判断、幕府に嘆願、松前奉行の取次により、鎖国時代異例のご沙汰が下った。林蔵が、測量家から探検家としての一面をも持つこととなる。



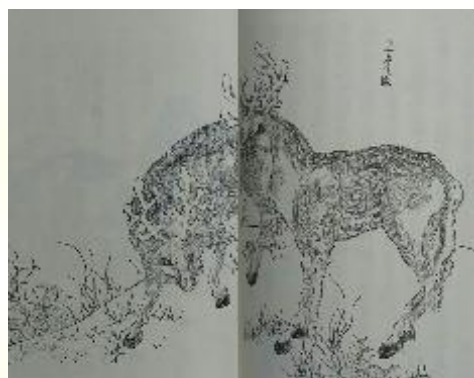
林蔵画・樺太最北ナニヨーより大陸を望む

3. いくつかのエピソード

林蔵の成果をコラムとして収めることは出来ないので、いくつかのエピソードを紹介したい。

Episode① Str. Mamiya Seto 1808

シーボルトは、林蔵の調査を評価して、その著書「日本」において、「Str. Mamiya Seto 1808」と書き記し、全世界に紹介した。日本人として、初めて世界地図に、その名が載った。



林蔵画・北蝦夷圖説よりトナカイの図

Episode②日本人として初めてトナカイと出会う

トナカイは、アイヌ語の「tonakkay」に由来する。

司馬江漢の『春波楼筆記』に、間宮林蔵が樺太を探検した話の中で「唐太の地に、トナカイと云う獣あり」と記されていることから、江戸時代のこののちに「トナカイ」の呼称が伝わったと考えられる。トナカイの和名「馴鹿」は、飼い馴らされた鹿を意味し、「じゅんろく」と読む。英語名は「reindeer」。司馬江漢(1747-1818) 絵師、蘭学者。浮世絵師の鈴木春重は同一人物。別号に春波楼がある。

Episode③小惑星(12127) 番 Mamiya(間宮林蔵)が誕生

1999年9月9日、札幌市にお住いのアマチュア天文家渡辺和郎さんが札幌市郊外で、太陽の周囲を3.84年の周期で回り続けている小惑星を発見した。

発見した小惑星12127番にMamiya(間宮林蔵)の名を申請したところ、正式に命名され、国際天文学連合(IAU:本部フランス・パリ)の小天体命名委員会の審査を経て、2001年1月9日小惑星センター(IAU第20委員会の傘下:事務局アメリカ・ケンブリッジ市ハーバード・スミソニアン天文台)から全世界に公表された。(2001年1月20日札幌天文倶楽部の記事より抜粋)

林蔵の動きが、皆様の活躍の支えになればと考えます。

